
時の彼方 舞い散る雪

凜驟雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の彼方 舞い散る雪

【Nコード】

N1042A

【作者名】

凜驟雨

【あらすじ】

あらすじは特にありません。気の済むように解釈をして頂き、感じていただければ幸いです。

ブローグ

これも、これも、それも……。

一面に広がる水溜り。

そこに浮かぶ奇妙な物体。

それを見て、また腹の中かがよじれるような、奇妙で苛立つ感覚がよみがえる。

また泣きだしそうだ。

頭の中が、カアッと熱くなる。

どうしてここにいるのだろう。

どうして私はここにいるのだろう。

何度か自分に問いかけてみるが、明確な答えなどできはしない。ならばと質問を端的にする。

私は誰？

私は私。

何故ここにいる？

ここが私の故郷だから。

何故この場所に立っている？

ここが私の家だから。

私は一人暮らし？

いいえ、私は父様と母様と三人暮らし。

私の家族は今どこに？

私の家族は床の上……。

また頭が熱くなる。

先程とは比べ物にならない程に。

たまらず床の上に膝をつく、と、ぴちゃ、と音がした。

ゆっくりと視線を下ろす。

そこにはよく知っている顔が三つ。

一つは父様……。

一つは母様……。

最後の一つは……朱色に映る、私の顔だった。

プロローグA

視界が無かった。

上下左右、どこに視線を彷徨わせようとも、何も見えなかった。そこが空間なのかということにさえ、疑問をもつほどに。

そして低く鋭い唸り声が、風に乗って耳元に届いた。

「お兄さん」

先程とは別の、呼びかける声が聞こえた。少年のような声だった。

「見える？」

その声は何も無い空間に響いた。

「だめ………だな」

二番目の声が答える。

「俺の手が君の頭にのつているという事実が、君から伝わってなければ信じられない所だ」

問いかけに答えた声が言って、手のひらからうなずく仕草を感じとった。

「さて、どうしようか？ 俺としてはここで野宿してもいいのだが、君はどうする？」

「お兄さん、そんなこと聞かれても、僕に選択権がないことぐらい知ってるよ。少しでもお兄さんから離れたら、さつき僕を囲んでた奴らに食べられちゃうからね」

少し残念そうな、不安そうな、曖昧な声で答えた。

「大丈夫、明日にはきっと視界が開けるさ」

風の音が一瞬大きくなり、近くにある渓谷をつかつて旋律を奏でる。

少年の声がトーンを下げて答える。

「明日もこの調子だったら、二人とも飢え死にだよ」

くくく、っともう一人が笑う。そして、

「そのときは俺が君か、どっちかが生き残るさ。数日くらいはな」

「それは100%、お兄さんが生き残るよ。僕にとっては残念だけどね……………」

深いため息をつくが、それは空間に飲み込まれる。

「そう心配するな、冗談だよ」

二番目の声がそう答えると、その時ほんの少しだけ、歪みができた。風の吹いてくる方向に不規則性が生まれ、まわりの空間が、ほんの少しだけ見えてくる。

「どうやら野宿しないで済みそうだな」

「…………… ねえ。見えるようになって、目の前にはただただ、何もない広い空間だけが広がっていたらどうしよう?」

少年の声が聞く。

「そうだな…………、そうであれば俺の好奇心は満たされるかもしれないが、そんなことはありえないということを、俺は知っているからな」

「つまらないこと聞いたね」

「気にするな」

「ねえ、つまらないことを聞いたついでに、もう一つ聞いてもいいかな?」

「なんだ?」

少年の声には興味が含まれていた。

「お兄さんっていったい何者なの?」

低く鋭い唸り声と、急に強まった風にまわりつくようにして、今まで視界を遮っていたものが消えていく。二番目の声の主は一呼吸おいたあと、視界に入った少年の耳元まで顔を下げ、つぶやいた。「それはトップシークレットさ」

思いは純真なままに

「お帰り、ニア」

森の奥、木漏れ日も射し込むかどうかというような場所で、老婆が言った。

老婆の目の前には薄い鮮やかな黒髪をもったニアが立っていて、首から下げていたペンダントが風に揺れると胸の中にしまいこみ、右手にもった薪の束を老婆に差し出した。

「ニア、もうすぐ日が暮れます。この辺は少しでも太陽が沈むと闇しかのこりません。季節もそろそろ秋になるし、明日からはもう少し早く帰っておいで」

ニアは老婆の言葉に首をたてにふると、

「はい。 師匠」

と言葉短く切った。

先程まではあった木漏れ日も、太陽の傾きと共にすぐに消え静かな闇が森を支配する。二人は家の中にある暖炉の前に向き合うように並んで座ると、老婆のいれたホットミルクを飲みだした。

ニアが静まり返った部屋を濁すように、ポツリと喋る。

「……師匠。私は明日にでも出立しようかと思っています」

「そうですね。あなたがここに来てから何年経ちましたかねえ」

「

「今日で、丁度10年になります」

抱えていたホットミルクへと老婆は目線を下げると、コップを軽くもてあそぶように持ち直し、目線だけはホットミルクに向けたまま言った。

「ニア。 復讐は、なにも生みませんよ？」

「 師匠、私は復讐などするつもりはありません。ただ、私と同じような境遇の人間を増やしたくないだけです。それに、一番最初に私が師匠にいった言葉、あの時なら師匠はそれを止めること

もできたはずです。でも、それをしなかった。いや、しないどころか、私の言葉を聞き入れてくれた。その師匠がなぜ、いまさらになつてそんなことをおっしゃられるのか、理解しかねます」

老婆はゆつくりと目線をニアへと向ける。

「ここで二人静かに暮らしませんか？」

ニアはゆつくりと首を横に振る。

「そうですね……。ならば私は、あなたが間違つた所へたどりつかないことを祈りたいと思います」

「祈る必要などありません、師匠。私の力は守るべき者のために使うと、この胸に誓つてますから」

そうニアは言うつと、席を立ち上がり老婆へと背をむける。

「では、私は用意がありますのでこれで失礼します」

遠ざかつていくニアの背中を老婆は見送ると、深いため息をひとつ吐き、ゆりいすにもたれかかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1042a/>

時の彼方 舞い散る雪

2010年10月20日03時42分発行